

平成 21年 5月 22日現在

研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18520182
 研究課題名（和文） サヴォイ・オペラにおけるイギリス帝国主義の生成の研究
 研究課題名（英文） A Study of the Savoy Operas and their influence on the formation Of British imperialism
 研究代表者
 金山 亮太 (KANAYAMA RYOTA)
 新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
 研究者番号：70224590

研究成果の概要：

サヴォイ・オペラの娯楽性の陰に隠れた影響の一つとして、19世紀末のイギリス人観客に帝国主義的発想を身近なものにしたという点が挙げられることを立証すべく、いくつかの作品に含まれる愛国的要素とそれの受容の様態について研究し、研究発表やシンポジウムの中で公表した。結果的に、この軽歌劇の持つ影響力の広さと深さが更に明らかになった。特に、サヴォイ・オペラは今日の英国の映像や活字メディアにおいて何らかの形で引用・言及されることが多いことが分かり、現代のイギリス人の中に息づいているイングリッシュネスは、この19世紀的価値観の延長上にあるのではないかという仮説を立てることに繋がった。また、ブリティッシュネスという人工的な概念ではなく、あくまでもアングロ・サクソンのイングリッシュネスの方に親近感を感じる人々の中に潜む人種的な問題に関する動揺が、この軽歌劇に対する根強い愛着の背後にあるのではないかという仮説も生まれ、将来の研究テーマとして、ポスト植民地主義以降の新たな国家観という問題も浮上してきた。これらのテーマに基づき、さらなる科研費補助金の対象となる基盤研究(C)の方向性が定まった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	540,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：英米文学

1. 研究開始当初の背景

①19世紀のイギリス大衆演劇および舞台装置や劇場形態の変化に関するこれまでの研究により、ヴィクトリア朝演劇の全体像は掴めていたが、個々の劇作家の作品を十分研究

するには至っていなかったため、今でも人気のあるサヴォイ・オペラを対象に定めた。そのため、脚本だけでなくこの時代の音楽に関する資料を収集する必要が生じたが、これについては未だ不十分である。

②帝国主義に関する基本的な文献は読了していたが、21世紀に入って「帝国」に関する重要な著作が現れる一方、従来のナショナリズムとは異なる形態のナショナリズムの萌芽も感じられる昨今の社会情勢を理解すべく、海外の研究者と連絡を取り始めた。また、ポスト植民地主義、ポスト帝国主義などと表現される今日の世界状況とサヴォイ・オペラをリンクさせるべく、このような言説が生成される現場（マスコミや言論の場、あるいは各種映像メディア）においてサヴォイ・オペラへの言及や類似した発想法がないかについて調査を開始した。そのためには各種映像資料が不可欠なることを痛感した。

2. 研究の目的

①人畜無害な娯楽作品と受け取られがちなサヴォイ・オペラが持つ影響力が今日まで残っていることを手がかりに、現代イギリス人の行動理念や発想法の中に、この軽歌劇に込められていた帝国主義的先入観や偏見が影を落としていることを証明しようとした。そして、そういった観念が今日もなお有効な思想的枠組みとして無批判に受容されている可能性についても考察しようとした。

②また、サヴォイ・オペラの同好会が英米圏の国々に多数存在していることから、草の根レベルでの愛好者たちの実態を知る必要があると感じ、実際にこの軽歌劇が演じられている現場に足を運ぶことの必要性を感じた。毎年行われている国際ギルバート&サリヴァン・フェスティバルに参集する愛好者たちの人種の特徴や年齢層、教育程度などを調査することで、彼らにとってはサヴォイ・オペラが民族的文化遺産として受容されていることを確認することを目指した。

3. 研究の方法

①既に入手済みのサヴォイ・オペラ関連資料の通読を行う一方、まだ未着手であった帝国主義関係の文献を読み進め、この問題に関する包括的理解を得ることに努めた。各作品の注釈を準備する傍ら、代表作の翻訳にも着手し、研究発表や各種シンポジウムでパネリストとしての発表を積極的に行った。この際に得られた各種の知見は既に発表された論文などに生かされていると共に、今後よりまとまった形で著作をまとめる際にも大いに活用したいと考えている。

②毎年8月に世界中から集まるアマチュア愛好家たちによって実施される英国バクストンの国際ギルバート&サリヴァン・フェスティバルに実際に参加して多数のパフォーマンスを観ると同時に、彼らがこの作品の

どこに共感しているのかについてインタビューを試み、重要な示唆を得た。また、各アマチュア劇団のディレクターと話す機会を持つことで、このような愛好会が発生する機運について何か共通項がないのかについて興味が湧いた。古くから存在する同好会もあれば、20世紀の後半になった生まれた同好会もあり、その設立の動機や背景なども異なっているが、ある種の共通目標が感じられた。

4. 研究成果

①サヴォイ・オペラが、それが成立した当時の帝国主義的発想を温存したまま今日も上演され続けることで、無意識のうちにそこで演じられているステレオタイプな発想法や偏見が拡大再生産され、次の世代に受け継がれることを可能にしていることを確認できたことが最大の研究成果であった。現代の映画やテレビの演出にサヴォイ・オペラが引用されている例もいくつか見つかった。この発見を元にして引き続き2009年度より3年間の予定で「サヴォイ・オペラがイングリッシュネスの形成に及ぼす影響についての研究」の題目で科学研究費補助金・基盤研究(C)を申請し、受理されている。

②英米圏の人々のうち、サヴォイ・オペラに興味を示す人とそうでない人の違いを精査していく中で、これが彼らのアイデンティティに関わる問題であること、ならびにブリティッシュネスという包括的かつ曖昧な部分のある人工的な民族概念ではなく、あくまでもアングロ・サクソンのイングリッシュネスにこだわる人々の中にある、ある種の人種的動揺までも推察することが出来、問題はにわかにポスト植民地主義以降の国家観という政治的なテーマを含むことになった。

③上記②のテーマについては、既にベネディクト・アンダーソン著『想像の共同体』を初めとする基本的な著作が揃っているが、その議論はどちらかというと大局観的な部分に止まっており、たとえば国民レベルの国家観を醸成するものとしての民衆娯楽の機能については、井野瀬久美恵著『大英帝国はミュージック・ホールから』を超える研究はまだ見られない。井野瀬の文献にしても、個別の作品に焦点を当てた部分は多くなく、むしろミュージック・ホールを取り巻く社会状況についての記述が中心となっており、劇作品そのものが人々に与えた影響について考察する場合には不十分な点があると考えられる。サヴォイ・オペラ研究はこれらの先行研究において、まだ十分に議論が尽くされていないところを埋める可能性があることを確信するに至った。

④論文3本、研究発表（シンポジウム3回を含む）4回など、サヴォイ・オペラや大衆演劇に関わる内容の発表を精力的に行い、有益なフィードバックを得ると共に、今後の研究方針についても重要な示唆を受けることができた。また、その際に類似の領域に関心を持つ研究者が少なからず存在することが確認でき、今後はより幅広い視点から研究を進めていくためのサポートを相互的に行っていくことを期している。

⑤2009年9月に刊行される予定の井野瀬久美恵編『新・イギリス文化史入門』（昭和堂）に、サヴォイ・オペラに関する章の執筆を行った。これは、2007年11月に日本ヴィクトリア朝文化研究学会第7回大会で行った研究発表と、2008年11月東北英文学会第63回大会で行われたシンポジウムでの発表内容を取り入れたものである。2008年に出版された新井潤美『へそ曲がりの大英帝国』の1章がサヴォイ・オペラに当てられているが、本書はそれに次いでこの軽歌劇を広く紹介するものとなる。

⑥勤務校からの補助金を得て、ブックレット形式の報告書『サヴォイ・オペラへの招待』（約50,000字、ブックレットの形式に直して67ページ分）を提出し、2010年5月に公刊する予定である。これは大学内の出版助成である以上、原稿提出後に編集委員会によって査読されることが予定されており、その答申内容を受けて加筆訂正が許されることになっている。ブックレットとしての性格上、一般読者にも理解しやすい文体と内容になることが求められるため、万全を期したい。これが刊行されれば、庄野順三『サヴォイ・オペラ』（絶版）以来の、この軽歌劇を正面から扱った著作となる。ちなみに、庄野の文献は福原麟太郎の一連の著作にヒントを得て書かれたエッセイであり、サヴォイ・オペラの全体像を伝えるものではない。

⑦現在全訳を試みているサヴォイ・オペラ全集は、最終的には『サヴォイ・オペラ大全』というタイトルで出版することを希望している。これは本邦初のサヴォイ・オペラの日本語版全集であり、英文学研究者や演劇研究者のみならず音楽や歴史学などの分野にも影響を与えることが期待される。現在のところ、全14編中、全訳が終わっているのが5編、注釈を付け終えているのが2編である。今後3年間の科研費補助金に基づく研究計画の中で翻訳終了を目指しているが、完成度をないがしろにするわけにはいかないので、あくまでも良心的に作業を進めたい。

⑧上記の⑤と並行して、より包括的な視点か

ら19世紀の演劇状況とサヴォイ・オペラの誕生とを絡めて論じることを目的とした『サヴォイ・オペラとその時代』についても準備を進める予定である。これがサヴォイ・オペラに関する本邦初の本格的な研究書となることを期しているため、⑥のブックレットで論じ切れなかった部分や、より政治的な議論も含め、今日におけるこの軽歌劇の位置づけを丁寧に論じるものにしたいと念じている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3件）

- ① 金山亮太
「ディケンズの公開朗読におけるテキストの問題（1）」、
『人文科学研究』、
新潟大学人文学部、
120輯、5~23、2007年、査読なし
- ② 金山亮太
「サヴォイ・オペラをアメリカで観る」、
『人文科学研究』、
新潟大学人文学部、
122輯、55~76、2008年、査読なし
- ③ 金山亮太
「血は水より濃いのか：英文学の場合」
『19世紀学研究』、
19世紀学研究所、19世紀学学会
2巻、87~104、2008年、査読あり

〔学会発表〕（計 4件）

- ① 金山亮太
「血と汗と涙—ギヤスケル夫人かく戦えり」
『日本ギヤスケル協会第19回大会シンポジウム：「ギヤスケルと演劇的要素」』
のパネリスト兼司会者として発表
2007年9月30日
於：中央大学駿河台記念館
- ② 金山亮太
「リテラシー（教養）としてのサヴォイ・オペラ」
『日本ヴィクトリア朝文化研究学会第7回大会』の研究発表
2007年11月17日
於：日本大学文理学部
- ③ 金山亮太
「血は水より濃いのか：英文学の場合」
『19世紀学学会第3回シンポジウム：
「19世紀学とは何か—19世紀学研究の可能性」』
のパネリストとして発表
2008年5月24日
於：新潟大学人文学部
- ④ 金山亮太
「ノンポリの政治性：サヴォイ・オペラ

の功罪について」
『東北英文学会第63回大会シンポジウム：「英国演劇研究の〈空白〉」のパネリストとして発表
2008年11月24日
於：東北学院大学

〔図書〕（計 2件）

- ① 金山亮太（共著）
「影響—白鳥は悲しからずや」
松岡光治編『ギッシングを通してみる後期ヴィクトリア朝の社会と文化』
溪水社、2007年11月、540ページ
- ② 金山亮太（共訳）
「グリフィス一族の運命」
日本ギヤスケル協会監修『ギヤスケル全集別巻Ⅱ』
大阪教育図書、2009年3月、730ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金山 亮太 (KANAYAMA RYOTA)
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：70224590

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし